

明石の史跡（66）日和見



日和見というのは、「天気模様を見ること」ともう一つ、「事の成行きをみて有利な方につこうと形勢をうかがうこと」（『広辞苑』）の両様の意味があることは、今更ながらという感じである。歴史的には、後者のほうに、注目があつまる。山崎合戦のとき、筒井順慶の洞ヶ峠（天王山の南約7キロ）の話（誤伝）は、あまりにも有名であるけれども、今回は、当地方の支配者として、応仁の乱以後を生きてきた、武士の話である。

天正5年（1577）10月以来、播磨に入国した羽柴秀吉への対応は、意外にも、小寺孝高（在姫路）以外は、親毛利の姿勢が明確であった。

書写山（円教寺）に布陣した秀吉は、平野部の空白を懸念したのだろうか、別所重棟（長治の叔父）を、阿閑城（播磨町）に配置した。

これにたいし、毛利方は、天正6年（1578）3月末、淡路の岩屋に集結した毛利・雑賀・淡路の軍勢（8,000余）は、4月1日、別府（加古川市）に上陸。阿閑城を攻撃目標とした。

劣勢の阿閑城を救うため、小寺孝高は、精兵500余率いて、姫路より駆けつける。全員が、鉄砲と弓矢で装備をしていなかった。当時のハイテク兵器である鉄砲を所持しないものには、投石用の石を準備させる。結果は、孝高軍の勝利に終わる（『黒田家譜1』）。

織田・毛利両軍の播磨における第一ラウンドの帰趨は、両陣営に影響を与えることになった。戦況を見つめていた高砂の梶原景秀と、明石則実は、即座に使者を孝高のもとに送り、秀吉へのとりなしを依頼した。

孝高の従兄弟でもある明石氏の判断は、当地方を戦火からまもったことは、慎重に評価しなければならないだろう。